

## 「ニューヨーク市貯蓄銀行」に関する一考察：イ リー運河建設との関連を中心にして

著者	加勢田 博
雑誌名	關西大學經濟論集
巻	28
号	1-4
ページ	647-666
発行年	1978-09-25
その他のタイトル	A History of the Bank for Savings
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/14757">http://hdl.handle.net/10112/14757</a>

# 「ニューヨーク市貯蓄銀行」に関する一考察

—イリー運河建設との関連を中心にして—

加 勢 田 博

## I

19世紀アメリカにおける公共事業の中で最大のものは、おそらくイリー運河建設であったといわれている<sup>1)</sup>。この運河は1817年の夏にその中部区間の開鑿が開始され、1825年秋に363マイルに及ぶ全区間が完成するまで8年余の歳月と700万ドルにのぼる巨額の資金とを要したのであった。こうした国家的大事業を成功させるまでにはその計画の段階を含めて数拾年に亙る苦難の時代があったことはいうまでもない<sup>2)</sup>。しかし、内陸交通改良に関する1808年のギャラティンの「報告書」<sup>3)</sup>にみられるように、この時代のアメリカにとって西部と東部とを直接結ぶ交通路の確保は、西部への拡大のためにもまた五大湖地域に

- 
- 1) Freeman Hunt, *The Merchant's Magazine and Commercial Review*, Vol. III (New York, August, 1840), p. 220.
  - 2) 詳しくは Ronald E. Shaw, *Erie Water West: A History of the Erie Canal, 1792-1854* (University of Kentucky Press, 1966), pp. 1~55; Nathan Miller, *The Enterprise of a Free People: Aspects of Economic Development in New York State during the Canal Period, 1792-1838* (Cornell University Press), chap. I~IV; 拙稿「イリー運河の建設——アメリカ産業革命史の一齣——」(関西大学『経済論集』第25巻第2・3・4合併号, 1976)等参照。
  - 3) Albert Gallatin, *Report of the Secretary of the Treasury on the Subject of Public Roads and Canals, 1808* (Augustus M. Kelley-Publishers, New York, 1968), pp. 5~8.

おけるカナダとの競争からも焦眉の問題となっていた。こうした背景を有しながらも、当時の連邦政府のおかれていた立場からして、イリー運河建設を国民的事業として国家が遂行することはできなかった。それ故、結局州間の商業上の競争によるニューヨーク州の地域的利害によってこれが実現されるに至ったのである。

ところで、アメリカ運河時代(1820—1860)の開幕<sup>4)</sup>を意味するイリー運河建設に当って最大の問題は、技術上の問題もさることながら、その巨額の資金をいかにして調達するかということであった。ニューヨーク州政府は運河建設のための資金を増税によって調達することは困難であると考え、州債(運河債)の発行によって調達することを決定した。そして、1817年に最初の運河債20万ドルを発行して以来その総額は1820年には150万ドル、1825年には770万ドル、さらに1831年には800万ドルに達した。こうした運河債発行による借入金は、1817年にはニューヨーク州の総借入金のわずか7%以下であったが、1831年にはその90%を占めるに至ったのである<sup>5)</sup>。

さて、一般に知られているところによれば、この大量の運河債は外国人投資

4) George R. Taylor, *The Transportation Revolution, 1815-1860* (Vol. IV, of *The Economic History of the United States*, New York, 1951), chap. III; Alvin F. Harlow, *Old Towpaths: The Story of the American Canal Era* (New York, 1964); Henry Meyer, *History of Transportation in the United States before 1860* (Washington, 1948), chap. VI, chap. VII; 拙稿「アメリカ産業革命期における運河建設について」(關西大学『經濟論集』第21巻第4号, 1971年)等参照。

5) Don C. Sowers, *The Financial History of New York States, from 1789 to 1912* (New York, 1969), p. 336 (APPENDIX IV) より算出。この時代の州政府の果たした役割については、Charles Frank Holt, *The Role of State Government in the Nineteenth Century American Economy, 1820-1902: A Quantitative Study* (New York, 1977), pp. 54~8. 交通改良のための政府投資に関しては A. Robert Sadove and Gary Fromm, "Financing Transport Investment", in Gary Fromm, (ed.), *Transport Investment and Economic Development* (Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1965) 参照。

家（主としてイギリス人）や運河によって利益を得るであろう富裕なニューヨーカー（地主，商人，及び土地投機業者）によって保有されていた。しかし，実際にこうした外国人投資を中心とする大口投資家の州債投資によって運河建設が進められるようになったのは，N. Miller の研究によっても明らかにされているように，中部区間が成功した後のつまりこの運河建設の後期においてであった<sup>6)</sup>。イリー湖とハドソン川を結ぶ運河の成功が未だ不確実であった建設初期においては，慈善事業的性格を持って誕生した「ニューヨーク市貯蓄銀行」（The Bank for Savings in the City of New York）がニューヨーク運河債に対する最大の投資家であった。換言すれば，小額貯蓄を対象とする貯蓄銀行が「大規模な運河投資の基礎」となったのである<sup>7)</sup>。したがって，イリー運河の建設資金について考察する際にまずわれわれにとって必要なことは，「ニューヨーク市貯蓄銀行」の特質を明らかにするとともにこの銀行の運河建設に果たした役割を把握することである。このような目的からして本稿では「ニューヨーク市貯蓄銀行」の発展の今日に至るまでの全過程を分析しようとするものではなく，あくまでもイリー運河建設に関連するその初期の歴史に焦点を合わせて考察するものである。

## II

さて，そもそも貯蓄銀行はフランスで最初に学問的に唱導され，ドイツで最初に実験され，そしてイングランドで最初に法的に規定されたといわれている<sup>8)</sup>。もっともイギリスでは1698年にダニエル・デフォーがその著書 *Essay on Projects* の中で後の貯蓄銀行に連なる制度を主張したことから，一般にそ

6) Nathan Miller, *The Enterprise of a Free People*, pp. 89~90.

7) *Ibid.*, p. 89.

8) Weldon Welfling, *Savings Banking in New York State: A Study of Changes in Savings Bank Practice and Policy Occasioned by Important Economic Changes* (Duke University Press, 1939), p. 3. ヨーロッパではすでに1765年から1796年の間に Brunswick, Hamburg, Oldenburg, Berne, Basel, Geneva 及び

のオリジネーターとして知られているが、18世紀の末には、イギリスの社会思想家を中心とする識者（Jeremy Bentham, David Hume, Robert Torrens, Thomas Malthus, David Ricardo 等）によって貯蓄銀行の必要性が説かれ、その結果これが一般に知られるようになったのである<sup>9)</sup>。個人主義的思想の広く普及したこの時代にあっては、自助と個人的儉約の精神を具体化する貯蓄銀行の出現は、貧窮者を救済する手段の一つとして時代の要請に合致するものであったといえよう。一方、18世紀後期といえば産業革命が工場制度と賃金労働者を創出して社会の諸制度を大きく変化させると共に多くの人々により高い生活水準を享受させつつあった時代であり、新しい金融サービスの必要をも増大させていたことは疑いない。

かくして、1810年にはスコットランド人の牧師で「貯蓄銀行の父」と呼ばれている Reverend Henry Duncan の指導の下に近代的貯蓄銀行としては最初のものがスコットランドで設立されるに至った<sup>10)</sup>。これに続いてイギリスでは多くの貯蓄銀行が開設され、1815年の終りにはスコットランドとイングランドで26行が、さらに1818年には英国諸島で465行が開設されていたのである<sup>11)</sup>。イギリスにおけるこうした貯蓄銀行の普及は、大都市における貧民救済の問題を抱えていたアメリカにも波及し、ニューイングランドやニューヨーク州の大

---

Kiel でこのような銀行が開立されていたという。E. W. Brabrook, *Provident Societies and Industrial Welfare* (London, 1898), p. 165. Quoted in Peter Lester Payne and Lance Edwin Davis, *The Savings Bank of Baltimore, 1818-1866: A Historical and Analytical Study* (Baltimore, 1956), p. 15.

- 9) H. Oliver Horne, *A History of Savings Banks* (Oxford University Press, 1947), chap. I～III; Alan Teck, *Mutual Savings Banks and Savings and Loan Associations: Aspect of Growth* (Columbia University Press, 1968), pp. 5～6.
- 10) Horne, *A History of Savings Banks*, pp. 39～57.
- 11) Alan L. Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks, 1819-1861* (The University of North Carolina Press, 1976), pp. 5～6; Horne, *A History of Savings Banks*, pp. 39～70; Albert Fishlow, "The Trustee Savings Banks, 1817-1861", *The Journal of Economic History*, XXI, No. 1 (March, 1961) 等参照。フィッシュローの研究によれば、1819-1824年にはイギリスの貯蓄銀行は商業銀行

都市で相次いで貯蓄銀行を設立させることとなった。

ところで、1816年以前の合衆国には貯蓄銀行は未だ創設されていなかった。しかし1816年に The Provident Institution for Savings in the Town of Boston が、さらに1818年には The Savings Bank of Baltimore が設立され、アメリカにおける貯蓄銀行の歴史が始まったのである<sup>12)</sup>。

いうまでもなく、アメリカにおいてもこれらの貯蓄銀行が設立された目的は慈善家の貧民救済事業の一環としてであった。雇用の季節の変動が激しくしたがつてその日暮しの貧困層に稼ぎの一部を貯蓄させることによって、こうした銀行は彼らが生活困難に陥るのを防ぎ多少なりとも安定した生活を享受させることができる、と設立者は確信していたからである<sup>13)</sup>。それゆえボストンの貯蓄銀行もボルティモアのそれも小口預金者を中心としており高額預金を排除していた。したがって、上述の銀行ではその初期の時代に預金者はボストンでは週100ドルまで、ボルティモアでは週20ドル（年間500ドル）までという制限をうけていた。「ボルティモア貯蓄銀行」の場合は1827年には利子（配当）は年4%を支払っており、これに特別配当として預入期間によって三段階に区分された利子が加算された。すなわち12カ月から2年未満の預金には年3%、2年以

---

の少なくとも2倍の利子（配当）を支払い、コンソル公債よりも高い利子を支払っていたという。Fishlow, *ibid.*, pp. 29-32. なお、イギリスの貯蓄銀行は Trustee Savings Bank（信託貯蓄銀行）であり、アメリカでは Mutual Savings Bank（相互貯蓄銀行）がほとんどであった。ちなみに、日本で「貯蓄銀行」が存在したのは明治13年から昭和23年までである。詳しくは加藤俊彦「貯蓄銀行条例をめぐる諸問題」（『経済学論集』第26巻第1・2号、1959年）；進藤寛「日本の貯蓄銀行（そのⅠ）」（『金融経済』76、1962年）；同氏「明治時代の貯蓄銀行」（金融経済研究所編『日本の銀行制度確立史』、1966年所収）等参照。

- 12) Lance Edwin Davis and Peter Lester Payne, "From Benevolence to Business: The Story of Two Savings Banks", *The Business History Review*, XXXII, No. 4 (1958), p. 387.
- 13) Emerson W. Keyes, *A History of Savings Banks in the United States* (New York, 1876), Vol. I, p. 11; Quoted in Weldon Welfling, *Mutual Savings Banks: The Evolution of a Financial Intermediary* (Cleveland, 1968), pp. 5~6.

上3年未満には年4%,そして3年以上のものには年6%が別に加えられた。ボストンの場合は500ドルを越える預金には特別配当は付かなかった<sup>14)</sup>。

しかし、上述のような預金額の制限もほとんどの預金者にとっては決して厳しいものではなかった。この時代の大衆にとって500ドルは大金であったからである。それは19世紀前半の物価及び賃金水準をみれば明らかであろう。例えば1816年の物価(ニューヨーク市)をみると、小麦は1ブッシェル1.75ドル、ベーコンは1ポンドが16セント、そして靴は1足2ドルであったが、一方、賃金は熟練労働者で1日1ドル、労働者は1日75セント(いずれも12~14時間労働)であり、住込みの雇い人は月10ドル、奉公人は週2ドルであったからである<sup>15)</sup>。こうした労働者にとって高額な預金は望むべくもなかったのである。

こうしてボストンやボルティモアに続いてニューヨークでも貯蓄銀行の設立が計画され、1820年以降には合衆国の主要な都市でこの種の銀行が多数誕生するに至った<sup>16)</sup>。その発展は第1表に示す通りであり、19世紀中葉にはアメリカの大業務組織のほとんどを貯蓄銀行が占めていたといわれている<sup>17)</sup>。

- 
- 14) Lance E. Davis and Peter L. Payne, "From Benevolence to Business", pp. 388-391.
- 15) Charles E. Knowles, *History of The Bank for Savings in the City of New York, 1819-1929* (New York, 1929), p. 9. この時代の賃金について詳しくは Walter B. Smith, "Wage Rates on the Erie Canal, 1828-1881", *The Journal of Economic History*, XXIII (September, 1963); *History of Wages in the United States from Colonial times to 1928* (United States Department of Labour, Bureau of Labour Statistics, No. 604, Washington, 1934), pp. 7~140; Stanley Lebergott, *Manpower in Economic Growth* (New York, 1964), pp. 530, 541-47 等参照。
- 16) 南北戦争までの合衆国においては mutual savings bank が中心であり stock savings bank はほとんどなく、また今世紀になって多くみられるようになったとはいえ、資金量が少なく金融上大いして重要ではなかった。Weldon Welpling, *Savings Banking in New York State*, pp. 4~5.
- 17) Lance E. Davis, Jonathan R. T. Hughes and Duncan M. McDougall, *American Economic History: The Development of a National Economy* (Illinois, 1969), p. 202.

第1表 合衆国における貯蓄銀行の発展

年	銀行数	預金者数	預金高(ドル)	一人当り預金高(ドル)
1820	10	8,635	1,138,576	131.86
1825	15	16,931	2,537,082	149.84
1830	36	38,035	6,973,304	183.09
1835	52	60,058	10,613,726	176.72
1840	61	78,701	14,051,520	178.54
1845	70	145,206	24,506,677	168.77
1850	108	251,354	43,431,130	172.78
1855	215	431,602	84,290,076	195.29
1860	278	693,870	149,277,504	215.13
1866	336	1,067,061	282,455,794	264.70

出所：Peter Lester Payne and Lance Edwin Davis, *The Savings Bank of Baltimore, 1818—1866: A Historical and Analytical Study* (Baltimore, 1956), p. 18.

### III

さて、ニューヨークでは1816年に貯蓄銀行設立の運動が開始され、Dewitt Clinton や Thomas Eddy といったイリー運河建設運動の中心的人物を含む30名のいずれも著名なニューヨーカーが集って銀行設立の会議が開かれ、その結果この銀行の特許を得るための法案が州議会に提出されることになった。しかし、この法案は議会を通過せずその後1819年までの3年間は設立運動も実質的には休止することになった。もちろん州議会では特別委員会を設置して検討を続けていた。しかし容易に特許が与えられなかった理由は、第1には貯蓄銀行の原理が十分に理解されていなかったためであり、第2には1811年から1820年の間にこの国で約200の銀行が破産したという当時のアメリカの金融情勢に関連して、預金の安全が特に重視される貧民の小額貯蓄のための新しい銀行に特許を与えることにニューヨーク州議会は非常に慎重であったからである<sup>18)</sup>。

しかし、1819年3月26日にこの銀行をインコーポレートする法案が州議会を

18) Knowles, *History of the Bank for Savings*……, p. 31; Davis, Hughes and McDougall, *American Economic History*, p. 201.



ようやく通過した。この法律によってニューヨークで最初の貯蓄銀行である The Bank for Savings in the City of New York が誕生し William Bayard (ニューヨークの銀行家)をはじめとする28名のニューヨーク市民が重役(受託者)となってこの銀行を運営することになった<sup>19)</sup>。そして頭取には William Bayard が就任し、副頭取には John Murray, Jun., Noah Brown 及び William Few が選任された<sup>20)</sup>。

重役名簿から明らかなように、この銀行にはニューヨーク州西部の運河事業に関係していた人々が多数加っていたのであって、Bayard や Murray も1790年代の Western Inland Lock Navigation Company の関係者であった<sup>21)</sup>。さらにこの会社に関してはもとよりこれに続くイリー運河建設に当って Dewitt Clinton と共に重要な役割を果たした Thomas Eddy もいた。彼は保険業で成功した実業家であるが<sup>22)</sup>、貯蓄銀行が労働者にとって有益でありニューヨークにおいても必要であることを早くから主張していたのである<sup>23)</sup>。

- 
- 19) Knowles, *History of the Bank for Savings*……, pp. 164~65. これ以後ニューヨーク市では1829年の Seamen's Bank for Savings をはじめ Greenwich Savings Bank (1833年), Bowery Savings Bank (1834年) 等1860年までに19の貯蓄銀行が設立された。Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 16.
- 20) Knowles, *History of the Bank for Savings*……, pp. 164~65. その他の役員(受託者)は次の人々であった。Brockholst Livingston, Cadwallader Colden, George Arcularius, Thomas Buckley, Duncan P. Campbell, Benjamin Clark, James Eastburn, Henry Eckford, Thomas Eddy, Philip Hone, John E. Hyde, Peter A. Jay, Zachariah Lewis, Dennis McCarthy, Andrew Morris, James Pelmer, John Pintard, Abraham Rupell, Jacob Sherred, Joseph Smith, Najah Taylor, Jeremiah Thompson, William Wilson, James Wood.
- 21) Ronald E. Shaw, *Erie Water West: A History of the Erie Canal, 1792-1854* (University of Kentucky Press, 1966), chap. I.
- 22) Thomas Eddy の実業家としての経歴については“Mercantile Biography”, *Hunt's Merchants' Magazine*, III (1840), pp. 424~431に詳しい。
- 23) Keyes, *A History of Savings Banks in the United States*, Vol. I, p. 309. Quoted in Welfling, *Mutual Savings Banks*, pp. 15~16; Franklin J. Sherman, *Modern Story of Mutual Savings Banks* (New York: Little and Ives, 1934),

ところで、この時代の合衆国における貯蓄銀行はすでに述べたように相互貯蓄銀行 (mutual savings bank) であった。したがって資本金を必要とするわけでもなく、受託者が預金を受け入れ、これを投資し、そして預金者に利子（配当）を支払うという業務を行っただけであり、それだけにまた預金者保護のための制約も厳しかったといえる。ニューヨークにおいても貯蓄銀行は合衆国政府ないしはニューヨーク州政府が発行する証券にのみその受託金を投資することができると定められていたのである<sup>24)</sup>。

こうして、「ニューヨーク貯蓄銀行」は1819年7月3日（土曜日）の夕方6時からOld Alms House として知られている建物の地下室で営業を開始した。事務所が開かれるのは毎週月曜日の午前11時から午後2時までと毎土曜日の夜6時から9時までの週6時間であった。これは労働者にとってもまた受託者にとっても都合の良い時間帯を営業時間としたためであった<sup>25)</sup>。そして受託者である28名の重役が交替で業務に携わるとともに、保険会社の従業員であった Daniel E. Tylee が書記に任命され若干の手当を与えられて受託事務を行っただけなのである<sup>26)</sup>。

#### IV

以上のように、貧民救済をその第1の目的として設立された貯蓄銀行は、設

---

pp. 35~55. Quoted in Teck, *Mutual Savings Banks and Savings and Loan Association*, p. 10; *Economic Study of Savings Banking in New York State* (The Special Committee of the Savings Banks Association of the State of New York, 1956), p. 3.

24) Knowles, *History of the Bank for Savings*, p. 164. この制限は次第に緩和されていった。

25) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 31.

26) Knowles, *History of the Bank for Savings*……, p. 40. 貯蓄銀行は貧民に奉仕する非営利の組織として最初のうちは関係者の無給奉仕で運営されていた。しかし、後に専門の銀行家によって経営されるようになって有給のスタッフがこれを行うようになった。

立者(受託者)の強力なモラル——「貧民のために」——によって運営されたのであり、したがって富める者の高額預金を排除する幾つかの規制が加えられていた。「ニューヨーク市貯蓄銀行」の場合は、まず預金高を5,000ドルまでと定め、その利子は1831年までは預金高にかかわらず一律に5%であったが、1832年以降は500ドルまでの預金については5%、これを越える預金については4%の利子を支払ったのである。そして1853年以降に設立された貯蓄銀行は、ニューヨーク州の法律によって500ドルまでの預金とそれ以上の預金とは1%の利子格差を付けることを義務付けられたのである<sup>27)</sup>。もちろんこうした規制が行なわれていたとしても、同一人が他の貯蓄銀行や同じ貯蓄銀行に幾つもの口座を有するという方法で規制を逃れることができたであろう。

いずれにせよ富裕な人々の預金を排除して比較的貧困層の儉約貯蓄を受け入れることを目的としたこの銀行の預金者とは実際にどのような仕事や職業の人々であったのだろうか。1820年の「第1回報告書」によれば、銀行が営業を開始した第1日目の預金者は80名であって、その預金高の合計は2,807ドルであ

第2表 第1日目の預金者の職業(仕事)

職 業	預金者数	職 業	預金者数	職 業	預金者数
医 師	1	窓 枠 製 造	1	印 刷 工	2
税 関 職 員	3	ポ ー タ ー	3	椅 子 製 造	1
馬 丁	1	聾啞学校教師	1	製 本 職 工	1
奉 公 人	5	人 夫	1	商 人	4
銀 行 頭 取	1	製 革 工	1	船 頭	1
コ ッ ク	1	大 工	4	銀行の受託者	7
紡 績 女 工	2	仕 立 屋	2	桶 屋	1
皮 革 製 品 店	1	靴 製 造	2	無 職	26
靴 磨	1	帽 子 製 造	1		
事 務 員	4	た ば こ 屋	1	合 計	80

出所: Knowles, *op. cit.*, p. 45.

27) Alan L. Olmstead, "Mutual Savings Bank Depositors in New York", *Business History Review*, XLIX (Autumn, 1975), pp. 299~301; Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, pp. 35~37.

第3表 開業1か月間の預金者数と預金高

月 日	預金者数	預金額(ドル)
7月3日	80	2,807.00
“ 5日	48	1,519.00
“ 10日	120	5,865.00
“ 12日	94	9,295.00
“ 17日	92	5,908.00
“ 19日	37	1,926.00
“ 24日	65	7,394.00
“ 26日	24	2,763.00
“ 31日	61	2,796.00
合 計	621	40,273.00

出所：Knowles, *op. cit.*, pp. 62~63.

った<sup>28)</sup>。これら預金者を職業別に分類すれば第2表の通りである。また、最初の1か月間の預金状況は第3表の示す通りである。さらに営業開始後6か月間の預金者数(口座数)は1,527名で(このうち有色人は184名)預金高は15万3,378ドル31セントに達し、この間に引き出された金額は6,606ドルで46名の残高がゼロとなり口座が閉じられた<sup>29)</sup>。第4表に示された預金状況から明らかなように、一回の預金額は30ドル未満が70%を占めていた。この金額は、先に述べたように、当時の労働者の賃金が1日1ドル程度であった点から考えてほぼ1か月分の賃金に匹敵するものであり、したがってこうした一般的な労働者によってこの銀行が最もよく利用されていたと推察される。

それではこの1,527名の預金者はどのような職業(仕事)の人々であったろうか。10名以上の預金者が従事していた職業を列挙すれば第5表の通りである。ここで最大の預金者は未成年者であるが、これは両親が子供の名義で預金したかあるいは比較的裕福な家庭が子供のために預金してやったからである

28) *First Report of the Bank for Savings in the City of New York* (New York, 1820), reprinted in Knowles, *History of the Bank for Savings*……, p. 171.

29) *Ibid.*.

第4表 開業6か月間の預金額と預金口数

預金額(ドル)	預金口数	預金額(ドル)	預金口数
1 ~ 5	821	100 ~ 200	141
5 ~ 10	412	200 ~ 300	57
10 ~ 20	256	300 ~ 400	29
20 ~ 30	158	400 ~ 500	23
30 ~ 40	56	500 ~ 600	12
40 ~ 50	164	600 ~ 700	7
50 ~ 60	32	700 ~ 800	6
60 ~ 70	37	800 ~ 900	1
70 ~ 80	22	900 ~ 1,000	7
80 ~ 90	16	1,000 ~ 2,000	9
90 ~ 100	177		
合計 2,443			

出所: *First Report of the Bank for Savings in the City of New York*, reprinted in Knowles, *op. cit.*, p. 173.

第5表 預金者の主な職業(開業6か月間)

職業(仕事)	預金者数	職業(仕事)	預金者数
靴 磨	10	ポ ー タ ー	15
パ ン 屋	11	水 夫	20
事 務 員	65	裁 縫 婦	34
コ ッ ク	35	靴 製 造	21
女 中	13	仕 立 屋	34
奉 公 人	143	ウ ェ イ タ ー	14
農 民	12	洗 濯 女	10
食料雑貨商	15	そ の 他	294
労 働 者	27	.....	.....
商 人	12	未 成 年 者	563
婦人服裁縫師	14	未 亡 人	98
看 護 婦	15	孤 児	20
印 刷 工	17	年 季 奉 公 人	15
合計 1,527			

出所: *First Report of the Bank for Saving in the City of New York*, reprinted in Knowles, *op. cit.*, p. 172. より作成。

う。子供達を別にすれば、特に多かったのが奉公人であって全体の約10%を占めていた。かれらは賄い付で部屋も与えられているところから、週2ドル程度であったと考えられる給金の一部分をしばしば預金したのであろう。この「報告書」からみるかぎり貯蓄銀行の本来の目的すなわち「儉しい貧民」に貯金をする習慣を植付けるといふ点ではほぼその目的を達成していたように思われる。もっとも、「ニューヨーク市貯蓄銀行」ではその初期に比較的規制が弱かったこともあって、他の貯蓄銀行より平均預金高が高額であった。たとえば1821年の合衆国全体の平均は132ドルであり、「ボルティモア貯蓄銀行」では100ドル、The Provident of Boston では119ドルであったのに対してこの銀

第6表 「ニューヨーク市貯蓄銀行」の発展

年	口 座 数	預 金 高	年	口 座 数	預 金 高
1820	1,481	\$ 148,194	1841	27,543	\$ 3,427,653
1821	2,684	413,433	1842	28,553	3,758,913
1822	4,116	659,846	1843	27,970	3,505,163
1823	5,383	863,465	1844	29,308	3,860,915
1824	7,002	1,085,069	1845	32,515	4,635,133
1825	9,043	1,388,716	1846	34,874	5,252,187
1826	9,564	1,409,592	1847	35,519	5,361,433
1827	10,501	1,600,392	1848	36,921	5,705,385
1828	12,249	1,867,073	1849	37,850	5,759,345
1829	13,420	1,923,054	1850	38,432	5,810,686
1830	14,707	2,061,091	1851	41,000	6,386,263
1831	16,506	2,346,664	1852	42,455	6,790,082
1832	18,492	2,733,351	1853	43,737	7,174,666
1833	19,421	2,748,511	1854	46,997	7,901,808
1834	21,914	3,105,778	1855	44,138	7,236,003
1835	22,594	3,085,738	1856	44,606	7,548,001
1836	25,295	3,628,783	1857	47,945	8,317,820
1837	26,427	3,533,717	1858	47,915	8,350,546
1838	23,938	2,710,358	1859	48,613	8,701,923
1839	25,220	2,961,887	1860	51,041	9,544,580
1840	26,457	3,125,546	1861	52,480	10,062,617

出所：Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 157.

行は154ドルであった<sup>30)</sup>。このことは、ニューヨークではいわば中産階級の高額預金がかかり含まれていたことを意味するといえよう。

いずれにせよ、「ニューヨーク市貯蓄銀行」は1819年に設立されて以来順調に発展（第6表参照）し、1825年には合衆国における貯蓄銀行の預金の56%と顧客の42%を占めるに至った<sup>31)</sup>。そして1860年にニューヨークの他の大貯蓄銀行——The Bowery Savings Bank——に首位の座を明渡すまで合衆国最大の貯蓄銀行としてその歴史を支配したのである。

## V

次に、商業銀行のように信用創造を行うことなく単に預金者と投資家との仲介者にすぎない貯蓄銀行が、熟練労働者、不熟練労働者、及び奉公人といった比較的下層の人々を中心とするニューヨーク市の大衆から受託した資金をどのように運用したかを考察したい。すでに述べたように、貯蓄銀行は認可に伴う法律によって資金運用に関して厳しい制限を受けていた。すなわち、その資金の投資先は、初期には連邦政府や州政府の発行する債券に限られ、これ以外の分野に投資することを禁じられていた。いうまでもなく、こうした制限は預金の安全を確保するためであったとはいえ、投資先を自由にするよりはより大きな利益をねらう受託者に銀行のポートフォリオを多様化させそれだけ州債の購入を減少させることになり、したがって低利の資金を州当局が獲得し難くなることをも考慮してのことであった。しかし、1820年にはニューヨーク市債への投資も正式に認められるようになり、投資先の制限はその後漸次緩和され、他州の債券への投資を認めるとともに商業銀行への預け入れや抵当貸付を行うことも認められるようになった。

30) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 56, Table 9.

31) Olmstead, "Investment Constraints and New York City Mutual Savings Bank Financing of Antebellum Development", *Journal of Economic History*, XXXII (December, 1972), p. 811. 「ニューヨーク市貯蓄銀行」は合併によって現在は The New York Bank for Savings となっている。

「ニューヨーク市貯蓄銀行」の最初の「報告書」によれば、営業を始めた直後の1819年7月には運河建設のためのニューヨーク州の長期債や6分利付債を購入し始め、9月には運河債を購入している。そしてこの年の12月末までに2万6,907.75ドルの運河債を購入した。1820年1月1日には9万7,912ドルにのぼるニューヨーク州債を保有しているのである<sup>32)</sup>。つまり、「ニューヨーク市貯蓄銀行」は開設後6カ月たらずにして、「イリー運河建設資金を調達するために(1817年以来)発行された総州債の約 $\frac{1}{8}$ を保有していた」<sup>33)</sup>のである。さらに1821年1月には47万5,465ドルのイリー運河債を保有していたのであり、この銀行に次ぐ第2位の保有者は4万ドル以下にすぎず、「ニューヨーク市貯蓄銀行は……イリー運河の最も重要な資金源となった」<sup>34)</sup>のである。かくして1819年から1831年までの銀行資産の半分以上はニューヨーク州の運河債によって占められていた<sup>35)</sup>。ちなみにこの時代のニューヨーク州における運河建設資金調達のための借入残高は第7表に示す通りである<sup>36)</sup>。

ところで、運河委員会が工事費の調達で特に苦労したのは、N. Miller が運河投資における「小投資家の時代」<sup>37)</sup>と呼んでいる1817年から1820年にかけて

---

32) Knowles, *History of the Bank for Savings*……, p. 178; Olmstead, “Investment Constraints and……”, p. 822. こうした政府債への投資はニューヨーク市の大商業銀行や私的銀行家を通じて行なわれた。しかし、まもなく貯蓄銀行は商業銀行を過ぎ、州政府と直接取引できるほど大きく成長した。(Margaret G. Myers, *The New York Money Market*, Vol. I [New York, 1931], p. 22).

33) Olmstead, *ibid.*, p. 822.

34) *Ibid.*, p. 824.

35) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 81; Olmstead, “Investment Constraints and New York City Mutual Savings Bank……”, p. 822.

36) ニューヨーク州の運河建設は1817年に開始されたイリー運河及びチャンブレイン運河以後1825年までなく、その後オスエゴ運河をはじめ多くの運河が建設されたがいずれも短距離の運河であった。(詳しくは *Tenth Census of the United States: Transportation*, IV, pp. 731~34; Meyer, *op. cit.*, chap. VI, 等参照。) したがって1825年までの運河建設のための借入はすべてイリー運河とチャンブレイン運河建設のためであったと考えられる。

37) N. Miller, *The Enterprise of a Free People*, p. 88.



第7表 ニューヨーク州の運河建設資金の借入残高

年	借入残高 (ドル)	
1816	.....	
1817	200,000	00
1818	400,000	00
1819	800,000	00
1820	1,493,500	00
1821	2,893,500	00
1822	4,243,500	00
1823	5,899,500	00
1824	7,567,770	99
1825	7,737,770	99
1826	7,844,770	99
1827	7,750,155	99
1828	7,940,155	99
1829	7,706,013	00
1830	7,825,035	86
1831	8,055,645	86
1832	8,055,645	86
1833	6,673,006	29
1834	7,034,999	68
1835	6,328,056	19
1836	6,366,806	73
1837	6,166,082	02
1838	9,308,120	41
1839	10,785,820	08
1840	14,126,647	76

出所：Sowers, *New York State Financial History*, p. 336 より抜萃。

の建設初期においてであって、この時期には運河は投資家にとって未だ安全な事業であるとは考えられていなかったのである。それ故、一般的にいて、ヨーロッパ（イギリス）の投資家が大规模に運河債に投資するようになったのは、この運河の成功が決定的となった1819—22年の恐慌後のことであった<sup>38)</sup>。州政府は重税や外国からの資本輸入による資金調達能力を有せず、その上運河

38) *Ibid.*, p. 99.

建設の成否が明確でない建設初期において資金問題を解決する大きな力となりえたのがまさに「ニューヨーク市貯蓄銀行」であった。この銀行はその資産内容から明らかなように19世紀中葉まで政府証券に資金のほとんどすべてを投じていたからである<sup>39)</sup>。さらに、他のニューヨークの貯蓄銀行と比較しても政府証券への投資の割合が特に大きく、抵当貸付の割合は非常に小さかった<sup>40)</sup>。以上のような点から「ニューヨーク市貯蓄銀行がニューヨーク州財政に与えたインパクトは未曾有のものであった」<sup>41)</sup>といわれている。

しかし、1826年以降イリー運河経営が好調で運河通行料収入が年々増加するに伴って<sup>42)</sup> 運河委員会は運河債の買い戻しを始め「ニューヨーク市貯蓄銀行」に運河債の売り渡しを求めてきた。これに対して銀行側は他にその資金を再投資する機会を与えられないかぎりこれに応じられないとして抵抗した。だ

39) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, pp. 162~63.

資 産 内 容 (ドル)

	総資産	債 券	商業銀行預金	そ の 他
1820年	147,912	147,912	0	0
1821年	535,683	535,683	0	0
1822年	744,480	701,745	42,735	0
1823年	865,238	722,435	142,803	0
1824年	1,098,477	1,005,582	92,895	0

出所：Ibid., Table C-1 より抜萃

40) Alan L. Olmstead, "New York City Mutual Savings Bank Portfolio Management and Trustee Objectives", *The Journal of Economic History*, Vol. XXXIV (December, 1974), pp. 820-21.

41) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 77.

42) ニューヨークの運河通行料収入 (ドル)

1835年……702,671	1838年……677,105
1836年……712,013	1839年……761,422
1837年……526,768	1840年……715,271

(*Hunt's Merchants' Magazine*, III (1840), p. 355.)

なお、運河通行料の決定については、Alexander Heard, "The Rate-Making Power of the State in the Canal Era: A Case Study", *Political Science Quarterly*, Vol. LXXVII (1962) 参照。

が、その後1830年代になって投資先の制限が次第に緩和されたこともあって、1833年には1837年に満期となる60万ドル分のイリー、シャンプレイン運河債を9%のプレミアム付で売却し、その資金で5%利付のペンシルヴェニア債を購入した<sup>43)</sup>。こうして、1833年以降この銀行のポートフォリオの中に占めるニューヨーク州債の比重は次第に低下していき、それに代ってニューヨーク市債の占める割合が増大した。そして、1836年以降は市債が州債を上回るに至ったのである<sup>44)</sup>。

## VI

財務長官アルバート・ギャラティンの「報告書」に示されているように、すでに19世紀初頭において連邦政府による内陸交通改良の必要性が強く主張されていた。しかし、当時は連邦政府が一部の州に特に大きな利益をもたらす事業を積極的に始めるような情勢ではなかった<sup>45)</sup>。州間(都市間)の商業上の覇権獲得競争はアメリカ産業革命の進捗とともに益々激しくなっており、とりわけ五大湖をめぐる西部商業の覇権争いは、合衆国の州間のみならず五大湖——セント・ローレンス川のルートで活躍するカナダ商人との競争という一面を有していた。したがって、このような状況の下でニューヨーク州がハドソン川と五大湖とを連結することに成功したことは、独りニューヨークのみならず合衆国の発展にとって極めて重要な意義を有していたのである。つまり、イリー運

43) Olmstead, *New York City Mutual Savings Banks*, p. 85. 1820年代後半にはイリー運河の成功に刺激されて多くの州で運河建設が行なわれ、これにともなう州債にこの銀行も投資するようになった。

44) Olmstead, "Investment Constraints……," pp. 827~8. 1829年にはこの銀行はニューヨーク市債の約半分に当たる34万9,800ドルを保有しており、1835年に水道事業のために発行された市債100万ドルのうち40万ドルを購入した。(Ibid..)

45) アメリカの経済発展における「自由放任」と政府介入の問題については Joseph Dorfman, "The Principles of Freedom and Government Intervention in American Economic Expansion", *The Journal of Economic History*, Vol. XIX (December, 1959) 参照。

河は、「この国の最も人口稠密で勢力を有する二つの地域を一体にするとともにアメリカの連合を守る最も強力な手段の一つを形成」<sup>46)</sup>したのであり、五大湖周辺におけるカナダとの競争においても非常に有利な立場を確保することになったのである。

ところで、「クリントン（知事）の英才と愛国心と政治的手腕とのすばらしい記念碑」<sup>47)</sup>といわれているイリー運河は、「中西部の貿易を〔ニューヨークに引き付けるといふその目的においてのみならず、財政的見地からも成功であった」<sup>48)</sup>のであって、この運河の繁栄はニューヨークをアメリカ最大の都市に発展させたが、他方ニューヨークの発展は、この運河建設の初期において資金供給の面で重要な役割を果たした「ニューヨーク市貯蓄銀行」をアメリカ最大の貯蓄銀行に成長せしめたのである。

「儉しい貧民」の貯蓄のために開設された貯蓄銀行は、その預金のかなりの部分が比較的裕福な階層（中産階級）によって占められていたとしても<sup>49)</sup>、また商業銀行のための預金収集機関として利用されたとしても<sup>50)</sup>、産業革命の進展とともに増大する都市労働者階級に「貯蓄のための安全かつ有利な金庫」<sup>51)</sup>を提供することによって、その当初の目的を十分に達成した。のみならず、その資金はさらに大きな役割を果たしたのである。すなわち、この時代の大規模な内陸交通改良において開発銀行や投資銀行としての機能を担っていたのは商業銀行であったが<sup>52)</sup>、貯蓄銀行もまた州政府等に開発資金を提供することに

---

46) Charles Hains, ed., *Public Documents relating to the New-York Canals* (New York, 1821), X *et seq* (Quoted in Havy N. Scheiber, *Ohio Canal Era: A Case Study of Government and the Economy*, [Ohio, 1969], p. 3).

47) Francis Wayland, *The Education Demanded by the People of the U. [nited] States* (Boston, 1855), p. 15 (Quoted in Dorfman, *op. cit.*, p. 581, footnote).

48) Myers, *The New York Money Market*, Vol. I, p. 22.

49) Lance E. Davis and Peter L. Payne, "From Benevolence to Business", p. 388.

50) Welfling, *Mutual Savings Banks*, pp. 23~27.

51) Davis and Payne, "From Benevolence to Business", p. 405.

52) William Diamond, *Development Banks* (Baltimore, 1957), pp. 27~28.

よって開發銀行の役割を演じた。小額の貯蓄を生産的投資に利用する組織的機能はこの時代の貯蓄銀行によって果されたのである。